

トップインタビュー

鳥取生協病院院長

齋藤 基氏

この人に注目

鳥取大学医学部地域医療学講座教授

谷口 晋一氏

学会ルポ

第4回鳥取県

国保地域医療学会

采たれ研修医!

国立病院機構

米子医療センター

クローズアップ

鳥取の研修医たちの声

# KLI MI KOS

とっりの医療

【クリコス】

春号

2012 spring



このみずみずしさを未来へ

鳥取県



# KLINIKOS

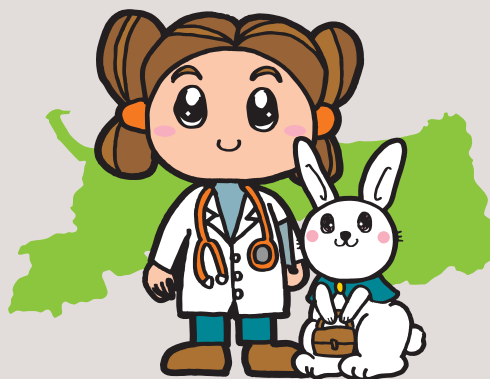
## KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課



医療の神様  
「**大**国主命」と、  
神話の地**鳥取県**

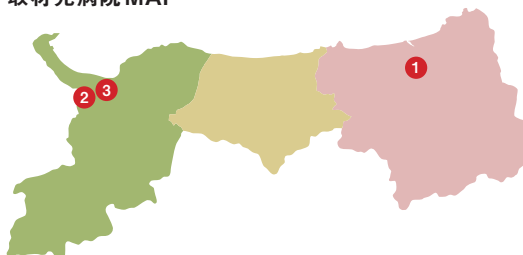
小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大国主命は、医療の神様とされています。

## CONTENTS

トップインタビュー 鳥取生協病院院長 <b>齋藤 基氏</b> 生活があって医療がある。 医療で人と巡り合う幸せ。	4
この人に注目 鳥取大学医学部地域医療学講座教授 <b>谷口 晋一氏</b> “鉄は熱いうちに” カリキュラムに現場体験加え、 地域医療担う医師養成始まる。	8
学会ルポ <b>第4回鳥取県国保地域医療学会</b>	11
来たれ研修医! <b>国立病院機構米子医療センター</b> 統括診療部長／南崎 剛氏 基幹型臨床研修病院に指定されて間もないが、 教育の体制は万全。 少人数の先輩医師と一緒に働き 学び取っていこうという気概のある方に是非、きてほしい。	16
クローズアップ 鳥取の研修医たちの声	18

### 取材先病院MAP



- 1 鳥取生協病院 <http://www.med-seikyo.or.jp/>
- 2 鳥取大学医学部附属病院 <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/>
- 3 国立病院機構 米子医療センター <http://www.nho-yonago.jp/>



鳥取生協病院長

# 齋藤 基氏

トップインタビュー

**Top Interview**

Motoi Saito



# 生活があつて医療がある。 医療で人と巡り合う幸せ。

一つひとつの医療、  
一人ひとりの巡り合いを  
大事にしたい

実は私は、町医者になりたいと思つていました。しかし、脳外科が専門なので開業するにはなかなか大変です。ところが鳥取生協病院に来てみると、患者さんとの距離が濃密なのです。それでいてベタベタするわけではなく、適当な距離感もある。ある患者さんが救急車で運ばれてきました。元氣

になられて退院して、何年か後に次は怪我をして来るかもしれない。その時には「あの時こうでしたね」おかげさまで」という話が自然にできます。

大阪市立大学からの派遣で私が当院に来た頃は、入局後半年から一年ごとに病院を移ることで勉強する時代でした。私の場合、6年間の研修の最後は静岡の鳥田市民病院での勤務でした。そこで専門医の試験に合格したら鳥取に行つてくれないかと打診がありました。鳥取ってどんなところ？と鳥取にい

た経験を持つ部長に相談したら「とってもいいぞ、ずっといたかったくらいだ」と褒めてくれましたね。「何がよかったですか？」と訊くと「食べ物があった」と(笑)。じゃあ5年程度はいるかなと思つて鳥取に来てみたら、今になってしまいました。

今に至るのは鳥取が気に入ったこともあるのですが、ちょうど自分で仕事ができるようになった時期と重なったのだと思います。都会では仕事が流れ作業のようになりがちです。ある疾患

## Profile

さいとう・もとい

- 1978年 大阪市立大学医学部卒業  
大阪市立大学医学部脳神経外科教室入局
- 1985年 脳神経外科専門医資格取得  
鳥取生協病院入職
- 2000年 鳥取生協病院病院部長
- 2001年 鳥取生協病院副院長
- 2005年 脊髄外科学会認定医取得
- 2011年 鳥取生協病院院長

その他現職

- ・NPO救命とつとり理事長
- ・愛真幼稚園理事

の方が来られて治ったらまた次へと。まさに一期一会、それで終わりです。

この医療はずっと一生続く。一人の方と救急車で巡り合った時から、お付き合いを一生継続することになる。

一つひとつの医療、一人ひとりの巡り合いがとても大事なのです。おろそかにはできません。私にとってはこれが理想に近いスタイルだったのです。脳神経外科医として全うする気持ちで来ましたから、院長に就任するとは全く思っていなかったのですが（笑）。

## 日常的な疾患に 対応する救急を 提供する

当院が鳥取市内の他三病院（鳥取市立病院、県立中央病院、鳥取赤十字病院）の仲間入りをさせてもらったきっかけは、救急医療でした。

1979年ごろ、当時の院長の段塚先生の時代に交通事故が急増し、搬送される患者さんも増加しました。医療が手薄となる土曜・日曜にもずっと診療を続けているとそれぞれの病院の医師が疲弊してしまうため、当院を含めた4つの病院で輪番制を敷くことになりました。

当院は他の大病院に比べると半分程度の規模ですが、「参加してくれないか」という要請があり、段塚院長も救

急医療には是非参加したいという思いがありました。そこで院長が以前に勤めていた病院で知り合った私の恩師の白馬明助教授を思い出して、彼に協力をお願いすることになり、大阪市大より派遣されることになりました。

救急を担う4つの病院の中では、当院はサポーター的な役回りですね。中央病院は、重傷の患者や心臓の病気など、最終的な段階での医療を担います。私たちは、例えば高齢者の肺炎や小さな怪我など、コモン・ディーズを対象に救急医療を担うことで、この地域のバランスを保てるのではないかと考えています。

私が1985年当院に着任した後でしたが、今後の高齢化を考えると脳卒中も増えてくることを予測し「脳ドック」もスタートしました。MRIによる脳血管撮影（MRA）の導入も当院が一番早かったですし、生協病院は新しいことに取り組むことが多いのも特徴です。

4つの病院はそれぞれ急性期医療の病院ですが、当院ではその後の回復期の病床を持って、家庭に帰るまでリハビリをすることで、社会に復帰しやすくする役割を担っています。移転・新築時にさらに充実させました。

最終段階の医療ではなく、その手前地域の人々に役立つ医療をしよう、そんな中間的な位置で、生協病院は重

要な役割をはたしていけると思っています。

## 緩和ケアへの思い 足湯という思いやり

当院はがん拠点病院としての県立中央病院と鳥取市立病院と協力して、緩和ケア病棟で大切な役割も担っています。手術をおこない化学療法を施したものの、もうこれ以上治療を続けても苦しい場合に、どのような医療が提供できるか。家庭に帰るまでのケアの場が欲しい、または家庭に帰れないけれど豊かな人生を送りたい。それらを叶えるためには緩和ケアが必要じゃないか。これが前院長の夢でした。回復する人の隣には諦めなければならぬ人もいる。その人たちが同室で同じ療養生活を送ってよいのだろうか？と悩んでいたのです。

そこで新病院をつくる時、その一つの解決手段として緩和ケア病棟を置きました。職員のモチベーションを上げて核になるものを、という思いもありました。

その病棟には足湯があります。珍しいでしょうか。「鳥取生協病院」とインターネットで検索すると「足湯がある病院」と出てきます（笑）。

足湯をつくったのは、以前の生協病



院が手狭になったので移転しようという時、鳥取市長の計らいで、鳥取日本交通から日交バスの土地を貸していただきました。

するとこの土地には源泉がありまして、ぜひ病院で利用してほしいのと。しかし温泉はメンテナンスが大変なので、せめて緩和ケア病棟の皆さんに温泉につかってもらうために導入しました。地域の方々にも、外来に来た帰りに足を温めてもらえるように開放

しています。

生協病院の成り立ちは生活協同組合  
ですから、組合員一人ひとりの出資金  
で運営されています。健康な方々から  
も出資金は頂いていますから、気軽に  
来て喜んでもらえるような施設にした  
いですね。

## 研修一年目から ここで育つ医師を 育てたい

当院のこうした歴史、役割、雰囲気  
が、臨床研修にも活かされています。

通常の病院では、大学の医局から医  
師が来て各科を形成するわけですが、  
生協病院では30年も前から、研修一年  
目の医師がここで育つスタイルにして  
います。

医師として育つとはどういうこと  
か。それは、どの患者さんにも自分た  
ちの医療を平等に施せること。プライ  
マリケアができる医者として育って  
いただくために、今という家庭医を育  
てる研修制度が当時からありました。  
3ヶ月ごとに内科・循環器・消化器、  
外科……どの分野も体験してもらっ  
て、スローローテーションのさがげとも言  
えます。2年間かけて自分に向いてい  
る分野を探せます。

さらに自分の得意分野、サブスペシ  
ヤリティを持ちたいという専門医資格

取得に応えることにも重点を置いてい  
ます。

鳥取では、スキルを共有しようとす  
る動きも活発です。私は大阪市大の出  
身ですが、他の脳神経外科医師は鳥取  
大、岡山大、神戸大と違う大学から集  
まってきたいました。それぞれの医師  
が持つ症例を共有するため、月一回勉  
強会を開きました。この勉強会でかな  
り育てられましたね。大学も出身も全  
く関係なく、鳥取の東部で切磋琢磨す  
るオープンな環境があります。「勉強会  
やるよ」と声を掛けると、地域の開業  
医の先生方もずらりと集まってきた  
れます。

特に今年から力を入れているのが  
NHKの番組『総合研修医、ドクター  
G』のように、研修医が総合医の力を  
持てるようになる研修です。鳥取大学  
の前教授の重政先生は、以前よりずつ  
と当院に勤めてくださっており、現在  
は木曜日に診療とカンファレンスにも  
来ていただいています。ベテランのブ  
レーンも同席する研修で、総合医とし  
ての技を磨き、深い知識を習得できま  
す。すべての疾患に基本的な知識を持  
ち、どんな患者さんが来ても診ること  
ができる。さらに得意な領域を持つ医  
師を育てる。そんな育成ノウハウを持  
っています。

もちろん鳥取で育って外に出ていた

だいても結構です。その経験を宝物と  
して持ち帰り、自分で得た技術を発揮  
してもらいたいと思います。

## 医療は生活の中の二部 生活があつて医療がある

「この鳥取でずっと働いていこう」  
と後押ししてくれたのは患者さんの姿  
ですね。

忘れられない「石原のおばあさん」  
は、もう亡くなりましたが、私がこ  
こに来る前にご主人を脳腫瘍で亡くし  
まして、それ以来脳外科ファンになら  
れて(笑)。身体の具合は悪くないの  
に毎週やつてきて、脳外科の新しい部  
長が来たらいさつに来るのです。

喋りは鳥取弁で、何を言っているか

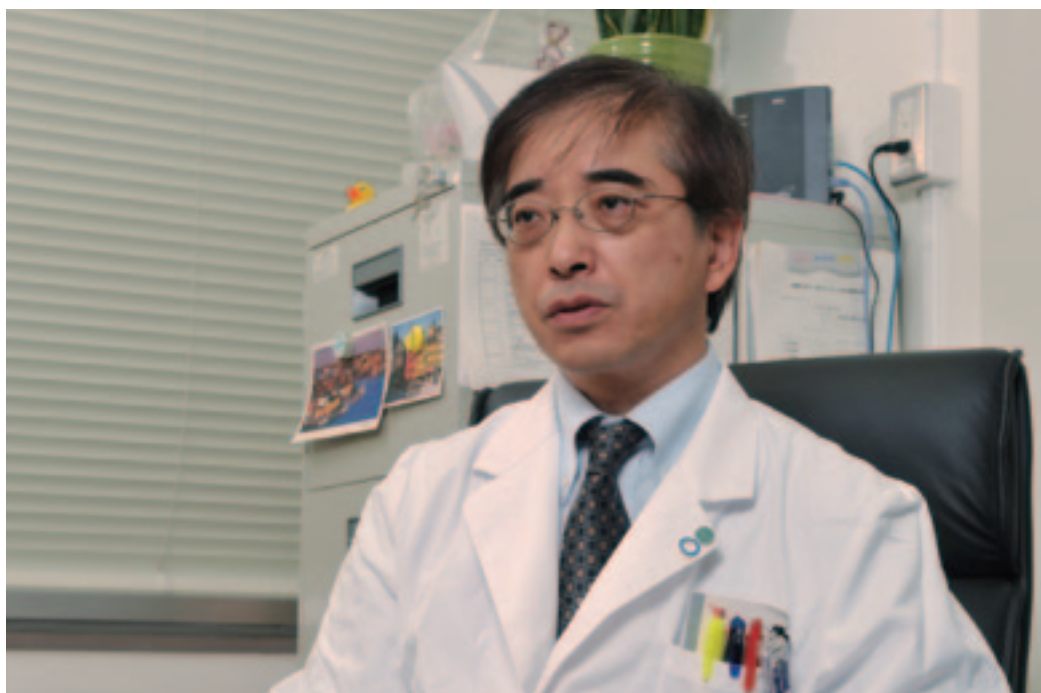
わからなくて(笑)。いつも身だしな  
みはきちんとして、ずっと診ていてあ  
げたいなと思えた方でした。

私の考えの中では、医療は生活の中  
の一部なのです。医療があつて生活  
があるのではなく、生活があつて医療  
がある。当然医療は大切なものとして  
付いてくる。しかし、より重要なのは  
生活の方なのです。医療さえ良ければ  
生活が良くなるなんてありません。生  
活環境や状況の改善、心の持ちような  
どを踏まえた医療を届けたいのです。

鳥取には大きな産業もありません。  
地域の人たちは苦勞しながら精一杯生  
きています。鳥取生協病院はそんな住  
民と一緒に生きていく。そこが私の気  
持ちに大きく同調できるところで、非  
常に気に入っているところです。



## この人に 注目



〳鉄は熱いうちに〳  
カリキュラムに現場体験加え、  
地域医療担う医師養成始まる。

鳥取大学医学部地域医療学講座教授

# 谷口 晋一氏

鳥取県の支援を受け、鳥取大学医学部に「地域医療学講座」が新設されて、2011年10月で1年が経過した。地域医療に貢献できる人材の育成、全人的医療ができる医師の養成を行うのが主な目的だ。具体的には、鉄は熱いうちに打ての諺にあるように、4年生と6年生の学生に一定期間、地域医療の現場を体験し、地域医療に関心を持つことから始まる。まだ、動き始めたばかりだが、さまざまな試みが行われようとしている。

医学教育は今まで大学病院の中で完結していました。系統講義後の5年生になって、大学病院の各科をローテーションして、臨床実習は終了でした。学外の診療所や自治体病院などを回って学習する機会が全くなかったわけです。文科省はこの問題に対して、新しい医学教育「モデル・コア・カリキュ

ラム」のなかで、地域医療実習やプライマリアケア演習が義務づけました。この教育を担う講座を本学でもつくる必要があることから、「地域医療学講座」が開設されました。

講座のスタッフは谷口教授以下、准教授1名、助教4名。【KLINICOS】

2010年夏号の「鳥取で活躍する女性医師」に登場いただいた渡邊ありさ氏も特任助教に加わっている。

具体的には、まず4年生に地域医療実習のカリキュラムが組まれています。今回は初年度ということもあり、1人当たり2ヶ所の地域医療機関に訪問する予定です。行き先は、国民健康





医学科4年生の地域医療体験実習  
(学外での病院実習)



保険智頭病院、岩美町国民健康保険岩美病院などの自治体病院や診療所だけでなく、山陰労災病院などの総合病院も入ります。チーム医療に重点を置いた総合病院では、丸一日をかけて医療現場を体験し、スタッフと接することによって、どのような考え方で地域医療を実践しているかを肌で実感するの狙いです。今後は、医療機関の数や種類を増やしていきたいと考えています。

関に1〜2週間滞在して、実際の医療現場で学びます。救急対応や外来診療、病棟カンファレンスなど、より実践に即した実習になると思います。病院によっては在宅医療を実践で学べる機会も出てまいります。

**鳥取大学医学部は、2006年度から「地域枠」制度が導入され、70人ほどの地域枠学生が在籍している。学生には奨学金が貸与され、卒業後の一定期間、地元での医療機関勤務が義務づけられている。このような地域枠学生を地域に定着させる役目も果たす。**

全国的に、都道府県が資金を出して寄付講座を開設する大学が増えていますが、寄付講座は開設期間が限定されてしまうデメリットもあります。本学の「地域医療学講座」も、鳥取県の寄附講座にもなっており、寄付期間は4年間となっています。鳥取大学としては継続的に地域医療教育を行っていかねばいけないとの判断から、大学からも予算が出ていて、鳥取県とのミックスの形でスタートしました。将来、県がどういう対応をするか未定ですが、講座の継続性は保障されています。今年からはじめて地域枠学生を対象にした「大山交流合宿」を行いました。まだ1回目ですが、鳥取大学、自

治医科大学のOB、鳥取県福祉保健部も加わり、グループごとにテーマを決め、地域医療について議論しました。

**年齢を重ねるといろいろな部位の疾患が併発する。それを専門医が診ていては効率が悪い。若い医師の専門医志向も強く、総合医的医師の養成は急務になっている。**

高齢化がすすんでいきますと、大学病院のように各臓器別の専門医が集まって診るといふスタイルは、たいへん非効率であるばかりか、患者さんにとっても幸せではありません。やはり、かかりつけ医や総合医的な役割を果たす医師が地域に必要なようになってきます。

しかし、医学生の間では専門医志向が強くなり、実際の社会ニーズとずれが生じてきていると思います。また、社会的に総合医の位置づけがはっきりしていないため、認知度の高い「専門医」に人気が集まる状況があります。総合医やプライマリケアの資格が取れるプログラムをしっかりと準備する必要があります。教育のあり方やカリキュラム内容も検討しないと、総合医の具体的な医師像をイメージできず、医学生は興味を持ってなくなってしまうと思います。

今後は、地域の病院や診療所を担う医師は純粋な専門医ではなく、やはり



第1回大山交流合宿

## この人に 注目



調査結果を地域住民に報告(江府町)



学生と稲刈り体験も(江府町)

総合医的な能力を持った医師が望ましいと思います。ただし、総合医だから専門性は全く持たないという医師ばかりでは現状にそぐわない面もあります。むしろ、自分の専門以外はいっさい診ないといった、いわゆる「ローカリスト専門医」を減らし、総合医マインドを持った医師を育てていくことが、現実路線だと思っています。

**谷口教授はもともと、糖尿病を含む内分泌代謝領域が専門だった。しかし、鳥取県内の一地域の実態調査をきっかけに地域医療に関心を寄せるように。**

私は鳥取大学医学部附属病院で糖尿



### Profile

たにぐち・しんいち

- 1985年 鳥取大学医学部卒業
- 1985年 鳥取大学医学部附属病院(研修医)第一内科
- 1986年 兵庫県香住町立香住病院・鳥取県済生会境港総合病院
- 1991年 日南町国民健康保険日南病院
- 1994年 NIH(米国国立衛生研究所)留学
- 1996年 鳥取大学医学部第一内科(病態情報内科学)内分泌代謝部門
- 1998年 鳥取大学医学部病態情報内科学 助手
- 2003年 鳥取大学医学部病態情報内科学 講師
- 2010年 鳥取大学医学部病態情報内科学 准教授  
鳥取大学医学部地域医療学講座 教授

病領域に取り組んで来ました。鳥取は人口が少なく高齢化率が高いので、莫大な人口を対象に臨床研究を行うには不適切です。糖尿病は大きな医療課題の一つですので、県の特徴を活かした研究やアプローチができないかと考えていました。その後、平成17年頃から

日野郡江府町における生活習慣病実調査「鳥取・江府 study」にかかわる機会を得ました。

江府町の診療所に出かけ、診察や健康診断、生活状況の聞き取り調査などを行っているうちに、学生時代に興味を持って取り組んでいたフィールドワークの記憶がよみがえってきて、住民の「生活と疾患とのつながり」を強く意識するようになりました。この江府

町での体験を通して、学生にも地域の「暮らし」を理解してもらいたいと考えたことが、この講座の教授になるきっかけになりました。

**地域医療学講座は、おもに医学生への教育プログラムを担当しますが、鳥取大学には、卒業研修用にもプログラムが用意されている。**

卒業研修については、地域医療学講座ではなく、卒業臨床研修センターの中にプログラムがあります。1〜2ヶ月という短い期間ですが、地域医療研修が義務づけられています。今後は、地域医療学講座と卒業臨床研修センターが連携して、プログラムを作っていければと、考えています。

鳥取大学医学部地域医療学講座の  
問い合わせ先

**鳥取大学医学部  
地域医療学講座**

〒683-8504  
鳥取県米子市西町36-1  
TEL : 0859-33-1111 (電話番号案内)



# 第4回 鳥取県国保地域医療学会



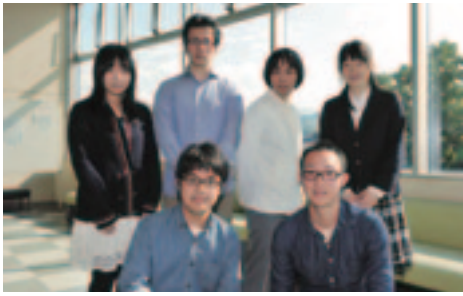
鳥取県出身の漫画家谷口ジローの『遙かな町へ』の舞台にもなった白壁土蔵と赤瓦の街、倉吉市から南へ6キロほど山間部に入ったところに、三朝町がある。今日（2011年10月29日）はそこで、「鳥取県国保地域医療学会」が開かれるという。この地域医療学会は、鳥取県国民健康保険診療施設協議会に加わる、地域の病院診療所の職員や自治体関係者や保健師などが、自らの研鑽と相互理解を目的に行っているもの。今年で、4回を数える。開催場所は、三朝町役場の隣にある三朝町総合文化ホールだ。

この三朝町は、クリニック前号（2011年秋号）の病院探訪「三朝温泉病院」があり、2011年11月に全国ロードショーした「恋谷橋」の舞台になった町だ。12時を回ったところに、三朝町総合文化ホールに、人が集まり始めた。今年は、研究発表に参加した、岩美病院、西伯病院、日南病院、智頭病院はもとより、自治体関係者も含め200人近くが集まった。

また今回は、2010年秋に開設した鳥取大学医学部の地域医療学講座の谷口晋一教授も参加し、特別講演を行ったほか、鳥取大学医学部医学科、看護学科に在学中の「地域枠学生」も参加した。

今年の学会長は、鳥取県東部山間部に位置する八頭郡智頭町にある智頭病院の濱崎尚文院長。「地域医療が担う医療とは？」と当たり前のことが当たり前に行ける医療機関をめざしてとをメインテーマに、講演や研究発表が行われた。

## “鉄は熱いうちに” 地域医療に関心寄せる医学生



学会に参加した鳥取大学の学生(左上から、都築茉莉子さん=保健学科、木村昂一郎さん=医学科、小林裕貴子さん=医学科、今川千尋さん=保健学科、左下から、大塚裕真さん=医学科、木原琢也さん=医学科)

学会に先立って、鳥取大学医学部から参加した医学科の学生に会うことができたので、「地域医療」に関心を寄せる理由を聞いてみた。

鳥取で働くことを決めている2年生の木村昂一郎君は、「鳥取で働く上で、

地域医療を知っておくことは重要だと思ひ、この学会にも参加しました」と言う。1年生の大塚裕真君は、「私も卒業しても鳥取に残りたいですね。自分の育った地でもありますし、地元だと自分が自分らしく仕事をしていけるように思えます」と、「地域枠」の効果が現れているようだ。

3年生の小林裕貴子さんも、「私も実は鳥取。鳥取で育った以上、地元に関心を持って返さなければならぬのではなか、という考えを持っています。もし、鳥取に恩返しをすれば、鳥取に残って医療をすることになるのでしようね。鳥取県内のどういう環境で働くことになっても、自分の育った地はどういうところで、何が求められている、これからどうなるのかということを知る必要があると思います。学校の机の上では知ることができない現場に触れて、考える機会を持つとうと思ひました」。皆さん、しっかりしている。

1年生の木原琢也君は、「大きな病院で働くより、診療所のようなところで働きたいですね。患者さんとの距離を近くに感じることができそうですから」と、鳥取の地域医療の明るい将来を肌で感じる事ができた。こういう学会の場に学生のうちから参加させるのは、現場を知るうえで非常に重要なことだと思ひました。

## 多職種スタッフの関わりで 経口で食べられるようになった 【岩美病院】



岩美病院  
田中英子さん

したのは、岩美町国民健康保険岩美病院主任看護師の田中英子氏だ。

姉妹の援助を受けながら独居生活を送っていた男性患者が、58歳の時に、脳幹梗塞により右完全麻痺、失語症となり、岩美病院の一般病棟に転院してくるところから、かわりが始まる。PTを目的に療養病棟に入所した時期に、患者の妹さんが突然亡くなり、そのショックで経口摂取ができなくなり、最終的に腸瘻を造ることになってしまった。

ところが、60歳の誕生日にチョコレートを出したところ、それを口から食べたため、経管栄養と並行して経口栄養を始めたという。リハビリの進展で、日常生活動作が増え、活気も現れてきたため、半年後には腸瘻を抜いたところ、現在では全身状態が安定しているそうだ。

13時より開会。14時から、地域の5つの医療機関から、今年も生々しい医療の現場を象徴する研究発表が行われた。まず、脳梗塞後遺症でいったんは栄養の経口摂取が困難となった患者が、医療スタッフの患者へのかかわりによって、再び経口摂取できるようになったという症例が紹介された。発表

目標を固定せずに、患者の状態に合

わせて変えていったところが着目点だ。最初は、腸瘻の管理と良好なコミュニケーションを図ることを目的にし、経口摂取が始まった段階で誤嚥性肺炎の予防を、ベッドを離れることができた段階になったら睡眠がきちんととれることを目標にしていた。

患者が口から摂取できなくなった理由が、妹の死による精神的なダメージであることにいち早く気づき、さらに経口摂取に戻すことを諦めなかったことが功を奏したのだ。



## 地域の中で認知症問題を解決 かかりつけ医との連携が重要に 【西伯病院】

認知症対策は、当事者やその家族の立場に立って住み慣れた地域で支援をするのが重要と考えられており、

南部町国民健康保険西伯病院では、2009年4月より鳥取県から認知症疾患医療センター事業の指定を受けて、認知症の対策活動を行っている。

西伯病院は認知症医療を積極的に行って、精神科が中心となって「もの忘れ外来」という専門外来を開設している。一般科病床でも認知症が認められるケースが多く、身体科入院の中で、せん妄、認知症等の治療を行うリエゾン医療が日常的に行われているという。

同病院の精神保健福祉士である古川敦氏によれば、認知症疾患医療センターに実際に相談してきた事例として

は、BPSD(認知症の行動心理症状)の相談や早期診断、医療機関への受診が難しいケースの対応、精神医療を必要とする場合の介入についての相談があるのだという。

相談元も、個人からではなく、医療機関や「地域包括支援センター」からの相談も増えてきているということだ。特に、地域包括支援センターからの相談として、本人やその家族に、認知症の周辺症状を理解してもらえないため、医療機関に受診させられないという声が多く、医療と介護の認識のずれなどに現れる相談も多いそうだ。

認知症疾患医療センターでは、医師会の医師、市町村担当者、包括支援センター、保健所、認知症病棟を持つ精神科病院と話し合う場である、医療連携協議会を通じて市町村の認知症対策と連携を進めている。センターをさらに認知してもらうために、年4回の研

修会も実施しており、他職種からの参加も求めている。かかりつけ医の連携をさらに拡充することが今後の課題なのだそうだ。

## 感染症対策にラウンドチェックや クイズ形式研修会を 【日南病院】

感染防止に工夫をこらし、効果を挙げている病院がある。日南町国民健康保険日南病院がそれだ。日南病院では、感染防止対策委員会の活動の中で



西伯病院  
吉川敦さん



日南病院  
浅野博美さん

「院内感染ラウンド」と呼ばれる活動と、クイズ形式の研修会が行われている。

臨床検査技師の浅野博美氏によると、「感染ラウンド」では、独自に作成したチェックシートに基づいて、1部門または1エリアを集中的に巡視チェックする。2〜3ヶ月に一度行い、委員会に報告し、翌月に委員が検証する。設備に係わる問題など改善できない課題は残るが、現状把握と問題発見ができ、業務改善に繋がっているのが特徴だ。

楽しく学習でき研修会への参加者を増やす目的で企画されたクイズ形式の研修会では、解答結果から職員の曖昧な部分や理解できていない部分が明確となると好評だそうだ。正解率の低い項目に重点をおいた講義も開催し、継続した教育を実施している。

日南病院は「町は大きなホスピタ

ル」というキャッチフレーズで地域医療を行っており、感染防止活動は院内にとどまらず、地域住民に対しても感染予防に関する情報を発信していく考えだ。

## 部署を越えて感染症情報を集約 地域固有の原因微生物を特定 【智頭病院】

国民健康保険智頭病院では、感染症診療も重点的に行っており、病院を挙げて、感染症情報を集約し、原因微生物

物の傾向を探ることで、地域特有のいわゆるローカルファクターの把握に取り組んでいる。

最終的には、培養と感受性検査の結果から最適治療を行うが、初期治療は地域の疫学情報などを総合して原因微生物を予測して治療を進める必要があるためだ。

自治医科大学卒業後4年目で同病院の内科医師である櫻井重久氏によれば、2011年4月1日から9月30日までの6ヶ月間に、感染症で入院した患者のうち、培養検体が提出されたものから、原因微生物を同定しようとした。この期間の感染症入院患者231例のうち、136例から培養検体が提出され、うち84例が肺炎、36例が尿路感染症、そのほか、皮膚・軟部感染症6例、血流感染症5例、消化器系感染症4例、骨ならびに関節の感染症が1例だったという。平均年齢は82・1歳

で、糖尿病、肝硬変、腎不全、悪性腫瘍などの免疫不全を起こしうる基礎疾患を持った症例が50%。

データベースは開始からまだ6ヶ月と短く、信頼性はまだ低いものの、いくつかの傾向が把握できたそうだ。肺炎の原因微生物で最も多いのは、*Klebsiella pneumoniae*、*Streptococcus pneumoniae*は、PISPとPRSPを合わせた耐性菌が40%、*Staphylococcus aureus*のうちMRSAが70%と、耐性化が進んでいることもわかったのだ。また、尿路感染症の1割程度がEnterococcus faecalisによるもので、セフェム系抗菌薬がほぼ無効なため、塗沫検査でグラム陽性球菌を認めた場合には抗菌薬の選択に注意が必要である。

このデータベースの特徴は、感染臓器に関わらず、診療科の垣根を越えて、医師、看護師、検査科、薬剤科が



智頭病院  
櫻井重久さん

共同して、地域で診療することとなる各種感染症の原因微生物頻度やアンチバイオグラムを作成していることである。このような調査では、分離された微生物が、コンタミネーションなのか定着菌なのか起因菌なのか判断が困難であり、分離菌すべてについてのアンチバイオグラムを作成している例が多いが、このシステムでは抗原検査、培養結果や治療経過（抗菌薬の有効性等）をふまえて主治医が起因菌を判定しているため、より臨床に即したデータを蓄積できる可能性が高いという。

## 総合医マインドにプラス サブスペシャリティ 【佐治診療所】

もう一人自治医科大学出身の医師の発表があった。鳥取市佐治町国民健康保険佐治診療所は、自治医科大学出身者が、県から派遣されている一人医師の診療所である。その診療所ではい

る「義務年限」の最終年を向かえている影嶋健二氏である。

佐治町自体は人口2370人ほどで、高齢化率は37%、一次産業従事者が多い。影嶋氏によれば、佐治診療所の現状イコール鳥取県の僻地で求められる医療とも考えられるという。

佐治診療所で住民アンケートを行ったところ、次のようなことがわかったという。

まず住民の40%が月1回以上利用していて、77%以上が年に1回以上利用しているということだ。住民が求める医師像は、「内科系の総合医」が63%と最も多く、自治医科大学出身者に大きな期待を寄せているとも思える結果だった。

救急医療では「何かあったときの救急医療」と現状維持を求める声が多く、実際には、時間外の件数はそれほど多くはなく、一次救急が中心で、ほ

とんどは処置後帰宅。入院のために、紹介や転送はまれで、住民自身が診療所に行くか行かないかの「自己診断」が行われていることもわかった。回数は、平均月5件程度。

慢性期疾患の総合的管理、定期注射の引き継ぎ、予防接種や訪問診療を望む声もあったという。健診、予防を含む、いわばプライマリ・ケアを求められており、すべての新患に対して断らずに初診にあたる総合医マインドの両方が必要となってくると、影嶋氏は述べている。

地域の健康維持には、質の高い慢性疾患の診療も必要だが、そのために複数の医師を配置することもできない。もちろん、すべて自分でやろうとか自己犠牲で地域に尽くそうとかでは、長続きはしない。

影嶋氏は、基幹病院を交え、転送のタイミングや、転送の有無を判断する

スクリーニングできるよう、サブスペシャリティを持つことも必要になるであろうと力説する。それは、医師のやりがいにもつながり、継続性にもつながっていくであろう。

その後、特別講演として、鳥取大学医学部の谷口晋一教授が、昨年になされたばかりの地域医療学講座について紹介。鳥取県が地域の医療機関や鳥取大学ともスクラムを組み、地域医療に対する意識を高め、医師教育を進めていこうとしていることがわかる学会であった。



佐治診療所  
影嶋健二さん



来たれ  
研修医!

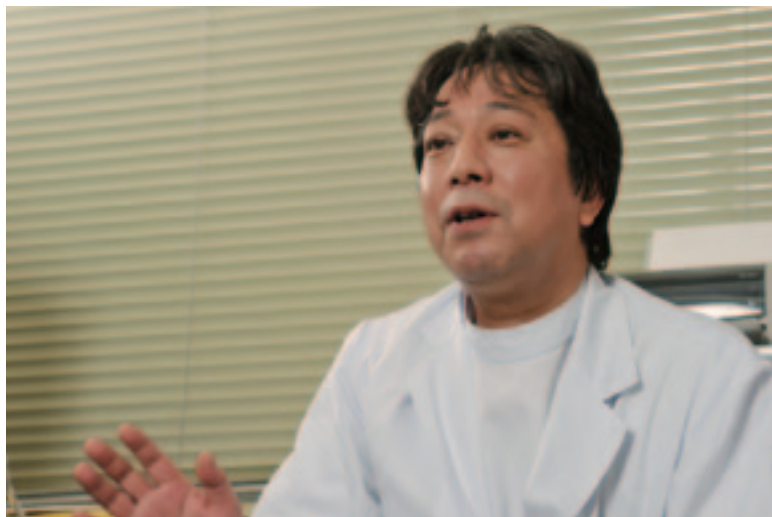
# 独立行政法人 国立病院機構米子医療センター

2011年に基幹型臨床研修病院の指定を受けた独立行政法人国立病院機構米子医療センター。

これまでも協力型臨床研修病院として、若い医師を育ててきたが、  
人材育成にさらに力を入れて取り組むことにしたのは、鳥取県の医療の未来を守るためであると、  
プログラム総括責任者／統括診療部長である南崎剛氏が語る。  
本格始動は2013年4月。どのような研修を計画しているのだろうか。

**Q** 貴院は鳥取県西部地区の中核を担う病院の一つと認識しています。

鳥取県西部地区で唯一、地域がん診療連携拠点病院の指定を受けているので、がん治療に積極的な病院といえます。血液がんに積極的に取り組んでおり、骨髄移植に加えて臍帯血移植や末梢血幹細胞移植などを総合的に行う「幹細胞移植センター」を2011年に設立しました。また、鳥取県でただ一つの腎臓移植施設ですので、1年に



**Q** 臨床研修プログラムの特徴を教えてください。

小児科の研修を必修科目としました。当院を含めて2病院で鳥取県西部地区の小児救急を担っているのです。1次から2次救急まで幅広く、数多くの症例を診ることが出来ます。2ヶ月の研修期間も、鳥取県内では鳥取大学の小児科系プログラムを除き、おそらく当院が初めてで、小児科をしっかり学

基幹型臨床研修病院に指定されて間もないが、教育の体制は万全。少人数の先輩医師と一緒になって動き学び取っていきこうという気概のある方には是非、来てほしい。

統括診療部長  
南崎 剛氏

1〜2例程度ですが、移植を実施しています。がん医療も腎医療も、臨床研修医が直接携わりませんが、先進医療を垣間みる機会があるのは、大変刺激的なことです。

んでほしいという、現場の声を取り入れた結果です。  
今は、医師不足のため、一人の医師が一手に様々な患者さんを引き受けなければならぬ時代——特に山陰地方では、その傾向は深刻で、特に小児医療の知識は必須ともいえるものです。  
小児科の専門医になるにせよ、違う分野を選ぶにせよ、小児医療を学んでおくことはマイナスではありません。

**Q** 貴院全体の医師数などから、指導体制はどのようなものになると想定されていますか。

当院は250床の規模の病院ですが、医師数は33名で内18名が初期臨床研修指導医です。指導医は毎年2名ず



つ増やしていく計画ですので、人数比では教育環境として充実しているといえるでしょう。とは言え、各科の医師数は、最多の外科5名、整形外科、消化器内科でも各4名。少ない科では1名で、少人数の先輩医師にみっちり教育される形になるはずで、常にマンツーマンとなる科もあるでしょう。それほど多くない医師で各科を担っている状態ですので、それについていけるパワフルな臨床研修医に来てほしい。次は外来、次は回診——と、軽いフットワークが、基本ですから。

**Q** 基幹型になることで、医師側の負担が増えるといった不安はありませんか。

これまで協力型としてやってきた経

験がありますし、当院は大病院から後期研修医を何人も受け入れております。臨床研修医、後期研修医と異なるものの、我々の仕事が煩雑になるのではないかと不安はありません。当院は、医師数の関係から、教えるあげるというよりも、一緒にやっているというスタンスになります。意欲のある方であれば、たくさんの学びのチャンスを得られるでしょう。

**Q** 貴院は電子カルテではなく、紙カルテを使われていらっしゃいますね。

2014年の病院建て替えに伴って電子カルテを取り入れる予定ですが、それまでは従来通り紙カルテを使用していきます。一見、時代遅れかもしれませんが、個人的な意見として、紙カルテは、若い人にもまだ知っておいてほしいと考えております。赴任する病院に必ずしも電子カルテが導入されているとは限りませんが、紙カルテの知識があつてこそ、電子カルテを有効に使いこなせる部分もあります。

それに、患者さんのお名前を、項目一覧の中から選択するよりも、手で書く方が、患者さんのお名前を覚えられ、患者さんとの距離感が縮まると私は感じています。

いずれは、子どもの頃からデジタル

デバイスを使いこなしてきた人が増え、人々の感じ方、考え方も変わっていくのでしょうか、まだ、紙カルテを使うアナログの感覚があつた方が良いのではないのでしょうか。3年後には当院も電子カルテを導入しますが、それまでは紙カルテで、紙カルテを使いこなす力を培ってほしいと思います。

**Q** ところで、貴院が基幹型臨床研修病院に指定されるまでの経緯を教えてください。

県内の医師数の減少が進むことに私たちは危機感を抱いていました。今いる若手の医師を鳥取県に引き止めた、県外の大学に行った方に戻ってきてほしいと考えて、基幹型臨床研修病院に手を挙げたのです。また、当院は国立病院機構の一つであり、医療従事者の養成を行う責務があります。今後は、協力型だったころ以上に積極的に医師養成に取り組んでいく所存です。

**Q** 病院を建て替えられるのは、臨床研修を見越してのことですか。

結果的に臨床研修医にとってもプラスになるでしょうね。患者さんから建物が古いとご指摘を受けておりましたし、新たに腎センターや、緩和病棟

を作る必要性が高まっており、総合的に建て替える時期ではありました。

2012年1月から第1期工事に着工し、2014年に完成する予定です。同じ敷地内に建てますが、工事期間も入院、外来の診療を通常通り行えるよう準備していますし、もちろん研修も継続して行えます。

建て替え後は病床が270床と、現在より20床増える予定ですので、ますます充実した研修ができるでしょう。

**Q** 最後に、貴院で臨床研修を受けるメリットを教えてください。

たくさんの方の疾患に触れたいから、都会の大きな病院に研修を受けに行くという声を聞きますが、駆け出しの医師が診られる部分は限られています。むしろ、当院の様な地域に根差した病院の方が、軽症から重傷まで幅広く、多様な疾患に接することができます。

気軽に先輩医師に相談や質問がしやすく、学びに適しております。私は広島県出身ですが、鳥取大学に入学以来ずっと鳥取県にいます。大学で腫瘍の研究に長年携わっていたためでもあるのですが、本当に住みやすいですね。環境はもちろん、人も優しいですし。良いところでは、是非、鳥取県の当院で研修を受けてほしいと思います。



新病院予想図

# 鳥取の 研修医たちの声

## 高い総合診療能力が身に付き 内容は希望に応じ柔軟に対応

鳥取県立厚生病院1年次研修医

**大田 里香子氏**

当院は、県中部の中核病院として、地域の急性期病院の機能を担っている病院です。病院規模に見合った適度な人数で研修ができ、たくさんの症例を経験できる恵まれた環境と感じています。毎週水曜日には、研修医同志が集まり、日々の勉強したことを情報交換し、共有することでお互い切磋琢磨しながら研修を行っています。

当院の研修の狙いは、common diseaseのマネジメント能力育成です。当院にある内科系・外科系のすべての診療科を研修でき、幅広い症例を学ぶことにより、高い総合診療能力を身に付けることができます。

そして、研修内容は個人の希望に応じて、柔軟に対応していただいています。また、指導医の先生方には、診療科の垣根なく指導していただくとともに、研修医のためにレクチャーを開催していただけており、大変勉強になっています。

指導医の実際の診療を間近で学ぶことで、それぞれの先生の医療に対する考えに触れることができ、これからの医師としての土台を築く良い研修をさせてもらっています。今後も一日一日を大切に、成長していきたいと思っています。



## 多くの科が集まって一人の患者を診る 診療科を越えた研修ができる病院

鳥取市立病院1年次研修医

**田淵 真基氏**

鳥取市立病院の基本理念は「信頼される、心温まる、そして楽しく働ける病院」で、何より楽しく研修したくて当院を選択しました。

2011年の当病院の初期研修医は、2年目も合わせて研修医が自分一人です。少し寂しさはありますが、メリットはとて大きいです。院内の先生方は全員がオープン状態であり、内科研修中の身であるのに、麻酔・救急科の処置や、手術に入れていただくこともあります。研修システムが確立した病院の研修医に自分の話をする

と、かなり驚かれますが、実際一つの診療科で完結することはなかなか少ないですね。内科、外科、整形外科、放射線科、麻酔科…多くの科が集って一人の患者を診る、その患者の診療を直接自らの目で学び、病態をじっくり検討するにはこの上ない研修システムだと考えています。

総合診療科の重要性が云われる今日、診療科研修と同時に、診療科を越えた研修をできる当院での研修は、どの診療科に進んでも最大限の力を発揮できるでしょう。





2010年冬号

**トップインタビュー**  
鳥取大学医学部附属病院院長  
豊島 良太氏

**この人に注目**  
鳥取県立総合療育センター  
療育支援シニアディレクター  
北原 信氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取大学医学部皮膚病態学講師  
山田 七子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取県立中央病院

**病院探訪**  
日南町国民健康保険日南病院



2010年春号

**トップインタビュー**  
鳥取県立中央病院院長  
武田 倬氏

**この人に注目**  
独立行政法人国立病院機構  
米子医療センター院長  
瀧副 隆一氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取大学医学部附属病院  
内分泌代謝内科（第一内科）  
大倉 裕子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取大学医学部附属病院

**病院探訪**  
智頭町国民健康保険智頭病院



2010年夏号

**トップインタビュー**  
鳥取市立病院院長  
田中 紀章氏

**この人に注目**  
鳥取大学大学院医学系研究科教授/  
鳥取大学染色体工学研究センター  
センター長  
押村 光雄氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
智頭町国民健康保険智頭病院内科  
渡邊 ありさ氏

**来たれ研修医!**  
山陰労災病院

**病院探訪**  
岩美町国民健康保険岩美病院



2010年秋号

**トップインタビュー**  
鳥取県立厚生病院病院長  
前田 迪郎氏

**この人に注目**  
社会医療法人仁厚会  
藤井政雄記念病院副院長  
・緩和ケア科病棟長  
足立 誠司氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取赤十字病院眼科副部長  
高橋 芳香氏

**来たれ研修医!**  
鳥取生協病院

**病院探訪**  
日野病院組合日野病院



2011年冬号

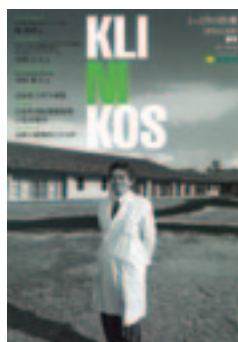
**トップインタビュー**  
独立行政法人労働者健康福祉機構  
山陰労災病院院長  
石部 裕一氏

**この人に注目**  
自治医科大学とちぎ子ども医療センター  
小児科研修医  
大谷 英之氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取県立厚生病院外科  
田中 裕子氏

**来たれ研修医!**  
日本赤十字社鳥取赤十字病院

**病院探訪**  
南部町国民健康保険西伯病院



2011年春号

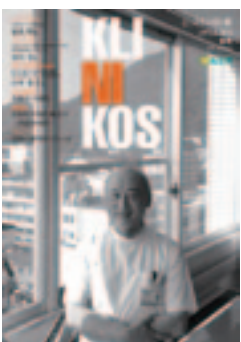
**トップインタビュー**  
鳥取県立総合療育センター院長  
鱈 俊朗氏

**この人に注目**  
鳥取大学医学部救急・災害医学分野教授  
鳥取大学医学部附属病院  
救命救急センターセンター長  
本間 正人氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取生協病院内科医師  
平田 雅子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取県立厚生病院

**病院探訪**  
江府町国民健康保険江尾診療所



2011年秋号

**トップインタビュー**  
鳥取赤十字病院院長  
福島 明氏

**この人に注目**  
鳥取大学医学部生殖機能医学教授  
低侵襲外科センター長  
原田 省氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
独立行政法人国立病院機構  
米子医療センター 耳鼻咽喉科  
山本 祐子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取市立病院

**病院探訪**  
鳥取県中部医師会立三朝温泉病院

## 編集後記

取材の翌月、別件で鳥取県を訪れる機会があった。街中で写真を撮っていると、ずっとそこに住んでいたかのようになり、気さくに声をかけてくる。すぐに打ち解けて話がはずむ。県外出身の医師が、皆一同にここで骨を埋めたいという理由が、この気さくに隠されているような気がした。

## STAFF

発行 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課  
(<http://www.pref.tottori.lg.jp>)

編集制作 株式会社メディカル・プリンシプル社  
(<http://www.medical-principle.co.jp>)

制作コーディネイト 杉浦美奈子

制作協力 Mamasクリエイティブ株式会社

エディター 松田淳

ライター 郷好文(株式会社ことば)、横山奈緒

カメラマン 寺尾豊

**KLINIKOS**  
とっつりの医療  
春号  
2012 spring

# 鳥取県で初期臨床研修をしませんか

鳥取県では県と県内臨床研修病院が協議会を立ち上げ、研修医のため様々な取組を行っています。  
また、県外大学医学生が県内臨床研修病院を見学する場合には旅費を支給します。（予算に限りがございます。）  
ぜひお問い合わせください。

## 鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- ・研修医の受講する救急講習（ACLS,BLS,ICLS）受講料を助成します。
- ・年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- ・研修医を対象とした県外・海外著名講師による臨床研修医セミナーを開催します。

**鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください。**

鳥取県の臨床研修病院の魅力を知ってもらうため、ホームページを作成しました。  
各病院の最新情報、プロモーションビデオなど魅力満載ですので、ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索

# 鳥取県で働いてみませんか

鳥取県はキャリア形成、子育て後の復職などをサポートしています。

鳥取県は、医師のキャリア形成、産育休後の復職などについても積極的に支援をしています。ぜひお問い合わせください。

## 地域医療に関心のある方へ

- ◆鳥取県医師登録・派遣システム（ローテートコース）  
複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。（その間に研修を行うことができます）

## キャリア形成を考えている方へ

- ◆鳥取県専門研修医師支援事業  
県外の医療機関に県職員として研修派遣します。
- ◆鳥取県医師海外留学資金貸付制度  
海外留学のための就学資金を貸し付けます。



鳥取県は民間求人サイト「e-doctor」に特設ページを掲載しています。

## 子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

- ◆鳥取県医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）  
・鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。  
・研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関の紹介を行います。

## 鳥取県内の求人情報を探している方へ

- ・県内医療機関の求人情報の提供、あっせん、紹介を行います。  
※鳥取県は無料職業紹介事業を行っています。

（見学を希望される方へ）

- ・県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給します。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索



■お問い合わせ先 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：ishikakuho@pref.tottori.jp